岐阜新聞　2020年（令和2年）12月21日 月曜日

ぎふスポーツ

ホッケー男子 日本L・H1

ホッケー男子の日本リーグH1（1部）最終日は20日、大井競技場でファイナルステージ決勝などを行い、決勝でレギュラーステージ2位の岐阜朝日クBDは、同1位のLIEBE栃木に2―2からSO戦を4―2で勝利し、2年ぶりの優勝を果たした。

岐阜朝日クBDは1点ビハインドで迎えた第4クオーター9分、PCから山田翔太のフリックシュートで同点。10分に勝ち越しを許したが、ラストワンプレーとなったPCで落合晴輝がこぼれ球を押し込み、SO戦に持ち込んだ。5人中4人が落ち着いて決め、全日本社会人選手権と全日本選手権を制したチームの母体となる岐阜朝日クと合わせ、初の〝3冠〟を達成した。

▽決勝

岐阜朝日クBD	2	0	0	1	0
LIEBE栃木	2	0	0	1	0

＝1―1、SO4―2＝

▽得点者【岐】山田（4Q9分）落合（4Q15分）【L】加藤（2Q10分）大槻（4Q10分）

岐阜朝日ク2年ぶりV

SO戦制し初の〝3冠〟

岐阜朝日クBD×LIEBE栃木＝SO戦に勝利して優勝が決まり、歓喜に沸く岐阜朝日クBDの選手たち＝大井競技場

終了間際PC、同点弾押し込む

勝利の瞬間

どんな逆境に立たされても誰も勝利を諦めず、2年ぶりに頂点に返り咲いた。岐阜朝日クBDは2度リードを許しながら、最終盤で同点。SO戦は1人目は失敗したものの挽回し、その強さを証明した。2冠を達成した、母体で社会人からなる岐阜朝日クと合わせて初の〝3冠〟に、長屋恭一監督は「歴史的快挙」と誇らしげに語った。

まさに筋書きのないドラマだった。第4クオーターに1度は追い付きながらも勝ち越された。守りを固める相手に絶対絶命に見えたが、選手はその心の隙を逃さなかった。「気持ちもプレーも引いているように感じた」と主将の田中世蓮。試合終了を告げるホーンとほぼ同時にPCを獲得、ラストワンプレーに勝利への望みをつないだ。

今季何度もチームを救ってきた山田翔太のシュートは防がれたものの、こぼれ球に落合晴輝。「おいしいとこ取りでしたね」と冷静に押し込んだ。SO戦につなぐ同点弾に「夢みたいだった」と笑顔がはじけた。勢いそのままにSO戦では守護神吉川貴史が3、4人目を連続セーブし勝ちをたぐり寄せた。前日も活躍した守護神は「落ち着いてプレーできた」と胸を張った。

昨年のシーズン終了後、チームの創設者の臼井認さんが亡くなった。「今年は負けるわけにはいかなかった」と藤井辰憲ヘッドコーチ兼選手。優勝が決まると遺影を高く掲げた。成し遂げたことがなかった3冠達成に、藤井は「本当にみんながよくやった」と総力戦で勝ち取った称号を喜んだ。（玉田健太）

清流からTOKYOへ

主将・田中

攻守の要成長「金」へ己磨く

その体は限界を超えていた。それでも、岐阜朝日クBDの主将田中世蓮はチームの攻守の要として試合に出続け、優勝を決める最後のSOも成功させた。「うれしいのとほっとしたので思わず」と試合後は目にうっすら涙を浮かべ、優勝の味をかみしめた。豊富な運動量が武器の一つだが、この日の、特に第4クオーターは満身創痍（そうい）だった。「後半から足がつったような状態で、第4クオーターはつっては伸ばしてを繰り返していた」と明かした。そんな状態でもチームを支え続けた。「絶対に負けたくなかったから」。

今季は途中からプレースタイルを変えたという。「今のままじゃ、ただうまいだけの選手だぞ」という藤井辰憲ヘッドコーチ兼選手の言葉がきっかけだった。それまでは周りを生かすプレーに主眼を置いていたが、自らも仕掛けるよう意識を変えた。「プレーの幅が広がった。成長できた1年になった」と振り返った。

日本代表でも中盤の要としてチームをけん引する28歳。最高の流れで来年の五輪イヤーを迎えることができるが、自分には厳しい。「日本のトップを目指しているわけじゃない。海外のトップと渡り合えないと」と悲願の金メダル獲得へ、さらに己を磨き続ける。

攻守にわたって奮闘した岐阜朝日クBDの主将田中